國學院大學学術情報リポジトリ

〔書評〕福井崇史著『外見の修辞学：一九世紀末アメリカ文学と人の「見た目」を巡る諸言説』

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2023-02-05
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 石原, 剛, Ishihara, Tsuyoshi
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000443

〔書評〕

福井崇史著『外見の修辞学―一九世紀末アメリカ文学と人の「見た目」を巡る諸言説』

石原　剛

視野の広さと議論の緻密さを備えた力作である。そして、何よりもこれまでのアメリカ文学研究を駆動してきた常識をまずは謙虚に問い直してみようという真摯な問題意識も有している。そういった著者の立場は、序章でのリアリズム論で読者に開陳される。言うまでも無く、教科書的理解に立てば、一九世紀後半のアメリカ文学は通常「リアリズムの時代」と紹介されるが、ではリアリズムの「リアル」とは何を意味しているのかという、全てのリアリズム文学研究者が自らに問わなければならない問題に向き合うところから本書は説き起こされる。そこで著者の福井氏が提示するリアリズムの定義とは、人智を超えた天上方向ではなく、むしろ水平方向の「地上的」動因、プロット、比喩継承を有した文学というもの。こういったリアリズム文学の理解を基盤にして、まさに目で見て分かるというリアルさの最たる要素である「見た目」という鍵概念を軸に、一九世紀末のアメリカ文学が写真技術、骨相学、観相学、といったあらゆる当時の「見た目」言説と密接に交渉していく姿が丁寧に検証されていくのだ。著者のいう「同時多発的地上化」という言葉通り、その射程には、通常の大文字のアメリカ・リアリズム文学に限らず、ダイムノヴェル、自然主義文学、ひいては二一世紀の大統領観をも含めた遺伝と人種を巡る議論なども収められ、極めてスケールの大きな議論が展開している。ひとつの書評でその全容を詳らかにすることは不可能に近いが、紙幅の許す範囲で、本書の魅力の一端を明らかにしてみたい。

さすがに冒頭で文学の「地上化」を前景化した著者だけに、最初に扱われるのはまさに「天上」ではなく「地上」でこそ受けの良かった大衆小説群である。例えば、一八九〇年代に爆発的人気を誇りながら、今となってはほぼ忘れられてしまった感のあるイグネイシャス・ドネリーの小説『シーザーの記念柱』（一八九〇年）や、幾度もの浮沈を経て、いまでは一九世紀アメリカのダイムノヴェリストの代名詞ともなったホレイショ・アルジャーの諸作が検討の対象となる。前者に関しては、アメ

リカにおける「見た目」による社会的弁別作業の総本山ともいえる移民問題や人種ステレオタイプとの関係、一方、後者に関しては当時広がりを見せていた探偵言説との密接な関係を中心に議論が展開する。並の論者なら、単なる同時代言説の反映主義で満足してしまうのかもしれないが、福井氏は、ドネリーにしてもアルジャーにしても、当時の「見た目」言説を引き受けることによって、皮肉にも作品自体が自己解体していく様を見極めるまでテクストを離さない。そこで、鍵となるのが「変装」に代表される「見た目は信用できない」という言説だ。見た目で相手を判断し、人種、民族、階級の理解点とせねばならぬ、といういわば見た目言説の成文法を攪乱せざるを得ない言説をも引き受けてしまったことによって、ドネリーの作品では骨相学、観相学的視点と相同する「我ら」と「彼ら」の弁別可能性が機能不全に陥る様子を、そして、アルジャーの作品では肝となっていたはずの成功の表象としての「見た目」がもはや信用ならぬ代物になってしまうという皮肉な状況を詳らかにしている。

さらに福井氏は、教科書的リアリズム文学の本家本元である大文字のリアリズム作家たちの諸作にも果敢に挑む。そこで見事な包丁さばきで料理されるのが、衆目が認めるリアリズム作家の大御所、ヘンリー・ジェイムズとマーク・トウェインの作品だ。例えば、ジェイムズの短編「ザ・リアル・シング」論では、写真にリアルさの基準を求める当時の言説に敢えて距離を置き、むしろ見た目と中身の不一致にこそリアルさを求めるジェイムズの絵画的センスが明らかにされる。そして、トウェインの問題作『まぬけのウィルソン』論では、優生学の立役者が開発した指紋鑑定法を大胆に導入することによって登場人物の黒人の血が暴かれ、そのことによって最終的には白人が黒人として裁かれていていくという展開が問題視され、そこに白人という「見た目」よりも一滴の「血」に依拠して黒人を規定していく当時のアメリカの「ワンドロップ・ルール」と同様の危うい人種観を見いだしている。

本書の強みの一つは、文学に限らず多岐に亘って参照される一九世紀末の種々の科学技術への言及がなされることだが、特にアメリカでは他者への眼差しが避けがたく人種化されてしまう事情を考慮すれば、福井氏が作品分析の割合を抑制して、一九世紀末の人種主義言説と遺伝の関係を主題に据えた章（第5章）を配置したことは、極めて理に適っている。そこで明らかになるのは、まさに「『色』と『血』の政治学」という章題にも明らかなように、実に巧妙に「色」（人種）が「血」ない

しは「遺伝」を巡る科学言説と連動する形でその優劣が主張されていったか、ということである。同章での配役はまさに似非科学者のオンパレードといった様子だが、当時にあっては「国勢調査」ですら、人種科学者のロビー活動の賜物であったといった説明を聞くと、彼らより一世紀前に生きたアメリカの科学精神の創始者ベンジャミン・フランクリンの至言、「理性のある動物、人間とは実に都合のいい生き物だ。したいと思うことなら何にだって理屈をつけられるのだから」という言葉が皮肉交じりに響いてくる。

こういった都合良く科学化される一九世紀末のアメリカの人種言説を前景化した上で、さらに本書では、ジョージ・ワシントン・ケイブル、アルビオン・トゥアジェイ、ウィリアム・ディーン・ハウエルズ、フランシス・ハーパーといった作家による一八九〇年代作品における有色でない有色人、つまり白い皮膚を持ちながら黒人の血を有する混血の登場人物たちに対する扱いについても鋭い分析が続く。議論は多岐に亘るが、根本的にはどの作品も有色性という人種意識に基づいた本質主義を裏書きする内容となっており、同時代作品の限界が示されている内容となっている。ならば、続いて検討される自然主義文学の諸作でこそ、見る側と見られる側の境界を越えたブレークスルーがなされるかと思いきや、やはりことはそう単純では無い。本書では、スティーヴン・クレイン、ジャック・ロンドン、アプトン・シンクレアといったアメリカを代表する自然文学の諸作におけるドキュメンタリー的「迫真性」が議論の俎上に載り、そこで興味とともに見られる対象でもあった貧困層の生活の実態がまさに見られる側の懐に入り込むことによって赤裸々に暴き出されていく。しかし、福井氏は、だから彼らはついに「見られる側」と「見る側」の限界を超越したという楽観的な結論には陥らない。むしろ、ふと立ち止まって、問いかける。彼らはどうやってこれらの諸作を生み出し得たのかと。つまり、彼らはそれぞれ貧困層の人間を演じ変装するという真正さを著しく欠く手法で真正なつまり「迫真性」の満ちたテクストを生産することができた皮肉を指摘し、やはり「見る側」と「見られる側」の力関係の格差を読者に突きつけるのである。

以上のように、本書では一九世紀末のアメリカ文学が「見た目」を巡る諸言説や見えないはずの「血」に捕らわれることによって様々な問題を孕んでいたことが明らかにされていく。楽観的な読者なら、しかし、一世紀以上を経た現在のアメリカならこれら一九世紀末の諸作で示された問題群は大方克服されたに違いないと考えるかもしれない。しかし、福井氏はどこまで

も楽観思考の心地よさに逃げ込むことはしない。そのことが端的に示されているのが、人の外見をめぐる終わりなき政治化を扱った結びの章だろう。そこで紹介されるのは、一〇〇年前に終わらせなければならなかったはずの「見た目」言説を巡る数々の亡霊である。無論、一世紀という年月を経ている言説群のそれこそ「見た目」は変化している。確かに、現在の遺伝学では人種間に遺伝学的差異があるとする立場は否定され、また特定の個人を特定する指紋鑑定は現在ＤＮＡ鑑定に取って代わられつつある。しかし、そういった状況にあっても、依然として「人種」を基準に医学的判断がなされている現実や、指紋鑑定に当初期待された人種特定への欲望がＤＮＡ鑑定に引き継がれている状況などが指摘される。そして、何よりもオバマの登場で明らかになったのは、ハイブリッドという別の人種概念を持ち出すことであり、人種カテゴリーの多様化という意味合いはあるにせよ、一部が唱えるポスト・レイシャルな世界とはほど遠い人種化された現在のアメリカの現実を読者に突きつけるのである。

では、救いはないのだろうか。そこで、福井氏が最後に挙げているのが、ステュアート・ホールの次の言葉だ。「重要なのはアイデンティティそのものではなく、何かを自分のアイデンティティとして引き受ける営為なのだ」（327）。福井氏同様、こういった営為に至る道への遠さを、読者は本書を通して痛感するわけだが、少なくとも、本書を通読した読者の多くは、「見た目なんか関係ない」といった安易な発言に対しては謙虚な姿勢と疑いの目を持って対峙することになるに違いない。本書は、時代と地域を限定しながらも、現代に通じる重い課題を突きつけてくる。アメリカ文学の学徒に限らず、「外見、偏見、人種、遺伝」と社会や人間の関係に関心を持つ学究が紐解くべき書物であり、広く読者の手に渡ることを期待する。

（四六判上製、三六八頁、春風社、二〇一八年二月発行、四〇〇〇円＋税）